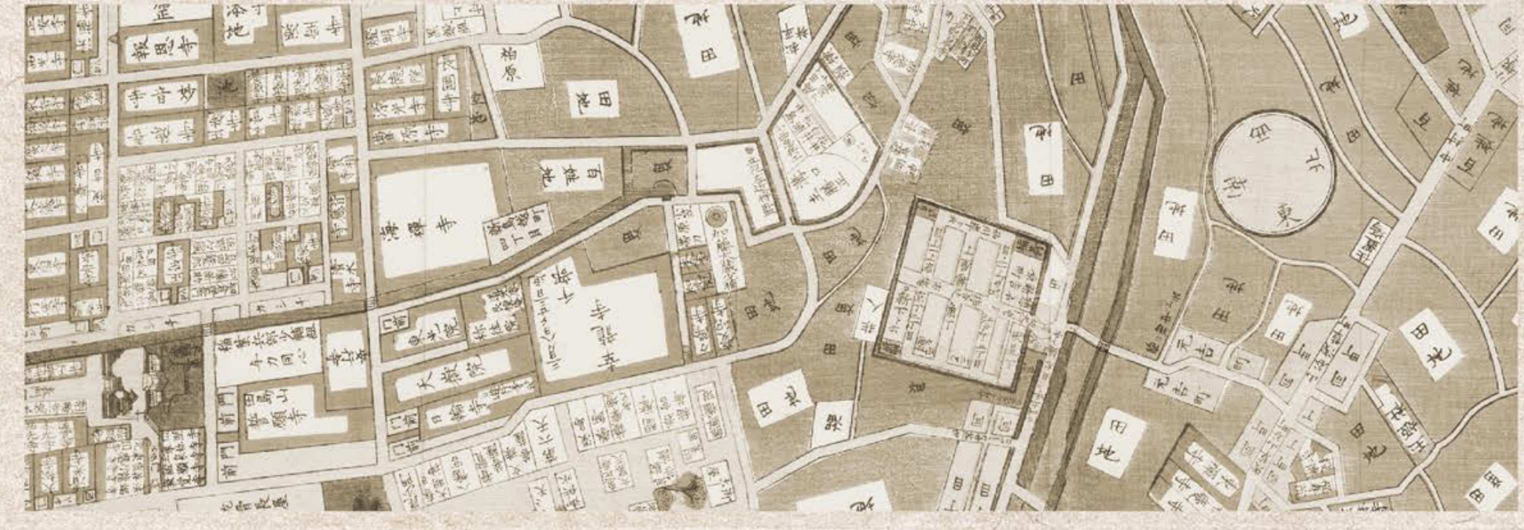
『鬼平犯科帳』細見

第八回
深川・石島町の船宿「鶴や」
～第一巻・第六話「暗剣白梅香」～

文 **松本英亜**
text by Hidetsugu Matsumoto



深川・石島町の船宿「鶴や」は、第一巻・第六話「暗剣白梅香」に初めて登場して来る。

以後、「鶴や」は、本所・二ツ目の軍鶏鍋屋「五鉄」や弥勒寺門前の〝お熊婆さん〟の茶店「笹や」とともに、火付盗賊改方の前線基地となっている。

「暗剣白梅香」の最後の見せ場は、この「鶴や」が舞台となって展開し、意外な結末を迎えることになる。

長谷川平蔵を暗殺せんとつけ狙う殺し屋の浪人・金子半四郎が、平蔵と岸井左馬之助が酒を飲んでいる「鶴や」へ斬り込んで来るのだが、一瞬早く、船宿の亭主・利右衛門の出刃包丁が、半四郎の腹をえぐるという話である。金子半四郎が、二十数年捜し求めていた親の敵が、利右衛門（本名・森為之助という武士）で、半四郎は返り討ちにあったというわけである。

この事件の落着後、平蔵は、利右衛門へ、「まあ、まる一年は江戸を留守にすることだな…」と言い、また、「来年の今頃、お前さんが帰ってきたら、このままのすがたで鶴やがまっている」とも言っている。こうして、利右衛門は、ほとぼりが冷めるまで、奥さんの故郷・近江へ帰って行く。

ところが、その後の船宿「鶴や」、何年たっても利右衛門が帰って来た形跡がない。相変わらず、密偵・小房の粂八が亭主におさまって、延々と、『鬼平犯科帳』のシリーズが進行している。

本来、「鶴や」は、利右衛門のものだ。

その後、利右衛門についての記述は、第一巻・第八話「むかしの女」に、「いま、鶴やの亭主・利右衛門夫婦は金子半四郎を返り討ちにしてから、しばらく江戸をはなれてい、あとは、平蔵の密偵・小房の粂八が亭主がわりとなっていたのである」と、ある。また、第二巻・第四話「妖盗葵小僧」には、「前の主人・利右衛門夫婦が近江から帰るまで〔鶴や〕をあずかっている粂八だが…」とあるが、屋内をかってに改装して盗聴できる「仕かけ部屋」まで造っている。第十二巻・第二話「高杉道場・三羽烏」では、「隠し部屋」を造り、怪しい客の監視にあたっている。ここでは、利右衛門についての記述は、近江の国へ帰ったことが書かれているに過ぎない。

利右衛門の消息については、とんと、記載がなく、その後どうなったのか不明である。

いったい、船宿「鶴や」は、誰のものなのか…。

筆者としては、近江へ帰った利右衛門から、ある日、長谷川平蔵のもとへ便りがあり、「拝啓、長谷川様には益々お元気で御活躍のことと推察いたします。日夜、盗賊追捕と江戸の治安維持のため、危険も顧みず御苦労なさっておりますこと、ただただ、恐れいるばかりでございます。〔暗剣白梅香〕事件では大変お世話になり、感謝の言葉もございません。さて、小生、妻と二人、すっかり近江の水にもなじみ、つつがなく余生を送っております。昨年秋には、当地において居酒屋〔利久〕を開業し、順調に営業を続けております。つきましては、もう江戸へ帰るつもりはございませんので、どうぞ、〔鶴や〕はご自由にお使いください。かさねがさねのお願いで、恐縮するばかりです。岸井左馬之助様にもよろしくお伝えください。敬具」

以上のような主旨のいきさつを、原作のどこかに書いて欲しかったものである。

殺し屋・金子半四郎の故郷・伊予の大洲城の桜

Profile
1942年東京生まれ。
東邦大学医学部卒業。医学博士。
医療法人社団同友会 顧問。
著書に『小さな旅　鬼平犯科帳ゆかりの地を訪ねて』
第一部～第五部（小学館スクウェア）。

「小さな旅『鬼平犯科帳』
ゆかりの地を訪ねて 第５部」
小学館スクウェア
定価：本体価格１，８００円（＋税）
好評発売中